

# 主権者教育のための目標と方法

## — 授業実践に向けてのフレームワーク —

沖縄県市民性教育副読本解説書策定委員会

### 1 主権者教育の構造 —求められる授業像—

主権者教育とは、単に選挙の投票率を上げるための教育ではありません。地域に参画し、国家を担い、世界の中で共生するために必要な知識と技能を身につけて道徳性を養う教育です。ですから、1人1人が公共空間の中でどのような役割を担うかを意識させることが大切になります。

#### <主権者教育の実現に向けて取り組むこと>

##### (1) 政治的教養を育む教育環境を整える

- ① 生徒を政治に関する具体的な議論や意見の対立から遠ざけず、1人の対等な市民として迎え入れる姿勢を持つ。
- ② 教師自身が自らの政治に対する態度・対応を省察し、その意義や課題点を自覚することで、生徒が模倣したくなる姿勢を見せることができるようにする。
- ③ 寛容的で共感的な人間関係を教室の中で形成できるよう、生徒指導に取り組む。

##### (2) 政治への「参加」を中心とした活動的なカリキュラムを設定する

- ① 始めから「決まった答え」が存在しない価値論争的な課題を取り上げる。
- ② アクティブラーニングを中心とした学習活動を設計する。
- ③ 個人の知恵や知識をこえた集合知を形成することに生徒1人1人が喜びを感じられるよう、最大限の配慮を行う。
- ④ 生徒の実生活や生徒が描く将来像が実際の政治と具体的につながるような問いかけやガイダンスを盛り込み、社会に参加・参画することの有意義さを実感させるように。

#### <求められる授業像>

- (1) 「民主的な空間」「民主的な作法の経験」「民主的であることとは何かの問い直し」の3つの基本要素が授業の中に取り入れられている。
- (2) 民主的な対話を支えるための言語活動が充実し、社会的な役割を自覚させるためのキャリア形成が促されている。
- (3) 「権利と責務に対する考察」「権力と権威に対する理解」「価値と寛容に注視した態度」を生徒に意識させる教育的支援が行われている。
- (4) 安易な多数決や少数の排除に陥らないための配慮が積極的に意識されている。

## 2 主権者教育の目標 — 評価の視点から見た全体像 —

主権者教育は多くの場合、アクティブラーニングの形式を取ります。主権者教育それ自体に特有の基礎的・基本的な知識というものは存在しませんが、代わりに各教科で学習した内容を持ち寄って活用することになるため、その活用の仕方に焦点を合わせた目標の設定や学習評価を行うことになります。

### < 観点別評価の視点から見た主権者教育の目標 >

#### 関心・意欲・態度

- ① 社会に対して、自分なりの問題意識を持って向き合うことができる
- ② 自分とは異なる立場の者に対して、尊重しようとする姿勢を取ることができる
- ③ 自分の意見が含んでいる偏向について意識しつつ、立場を表明することができる

#### 思考・判断・表現

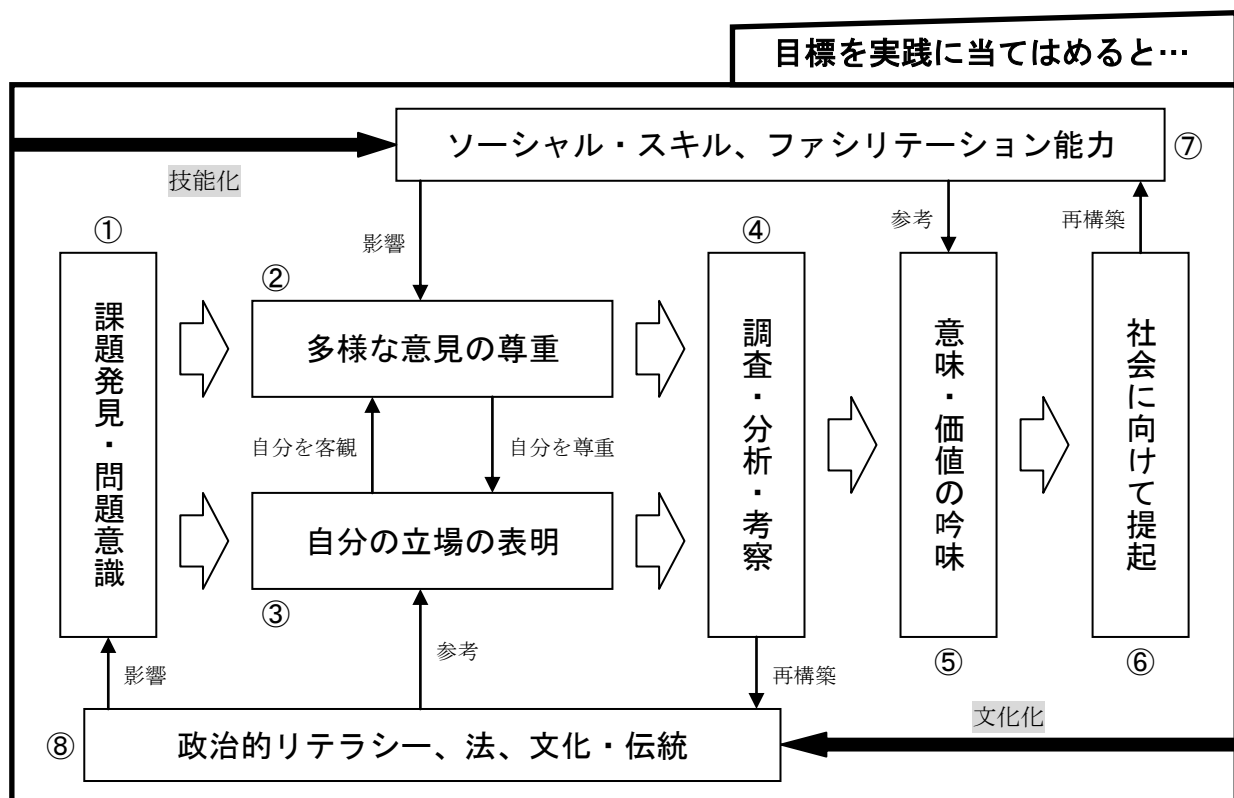
- ④ クリティカルシンキングにより、社会を多面的・多角的・構造的に捉えている
- ⑤ 自分と社会・他者がとどのように繋がり、影響しあっているのか捉えている
- ⑥ 公共空間に自分らしさを持って能動的に参加・参画している

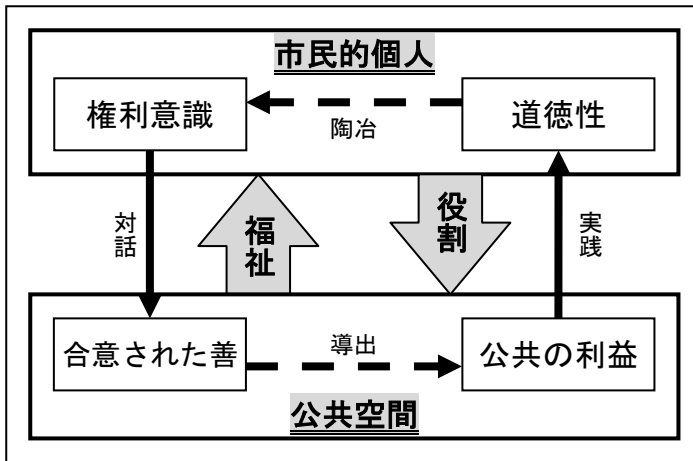
#### 技能

- ⑦ 他者と共生・協働するために必要なスキルを意識して実践しようとしている

#### 知識・理解

- ⑧ 社会システムの成り立ちや理念、構造的に対する理解を問い直そうとしている





【図1】 良き主権者と健全な社会の関わり

### 公共善を実現する主権者の姿

- ① 権利意識から生じた承認欲求を公共空間での対話につなげる。
- ② 対話により合意された内容から、公共の利益が導き出される。
- ③ 公共の利益を実現しようとする実践的態度が、道徳性の卓越を生み出す。
- ④ 卓越した道徳性により高次の権利意識が陶冶され、合意された善の問い直しに関心が向かう。

## 3 主権者教育の方法 —授業づくりと教師による支援—

子どもは子どもなりに、社会に対する関心や問題意識を持っています。しかしこれまでの日本では、子どもが大人の世界に口出しをしてはいけないという暗黙のルールがあったために、多くの子どもが関心や意欲の表し方、社会との関わり方について不安を抱えています。子どもが持つ本来の能力を発揮させる支援が、教師には求められます。

### 1 教材の研究

- ① 身近な地域社会における具体的な課題や価値対立・論争を積極的に教材化する。  
⇒ 歴史的な内容をテーマにする場合は、歴史的な事象に関する意見対立などを取り上げる。
- ② 価値対立の構造が、どのような普遍的・汎用的価値を伴ったものなのかを明らかにする。
- ③ 価値の善悪ではなく、その価値がどのような妥当性を内包しているのかについて検討する。

### 2 教師の振る舞い

- ① 教師は自分自身の偏向を自覚し、生徒に対する自身の権力性や権威性を意識しておく。  
⇒ 指示や主張の根拠を説明し、「民主的な手続き」「民主的な作法」を実践してみせる。
- ② 生徒の主張の中に潜む人類社会で普遍的に見られる価値を見つけ出して、その価値の意義を認め承認することを通し、生徒の自己有用感や生徒同士の共感的人間関係を深める。

### 3 問いの提示

- ① 事前アンケートの実施などにより、生徒の問題意識に沿った発問を用意することが望ましい。
- ② どちらにも正当性が認められる、対立する2つの価値を吟味させるような発問形式にする。
- ③ 教師自身の問題意識から発問を提示する場合は、生徒がその問いに対して共感し主体的に考えることができるよう、その問いが持つ価値や生活との関わりについて十分に説明する。
- ④ 問いに対して自身の立場を生徒が確立した後には、その立場は特定の価値に沿って偏向したものであり、同じ重みを持った異なる価値に変更した別の立場も存在するという意識（「留保の姿勢」）を持たせるよう、立場を入れ替えて考えさせるなどの工夫を加える。

#### 4 対話の構築

- ① アイデンティティは他者との比較を通じた自分自身の見つめ直しで深化されていくことに留意して、自分を高めるために他者を尊重する必要があることを事前に説明しておく。
- ② 自分や他者が主張の基盤としている価値観は、どのような立場からの妥当性を掲げ、どのような立場を想定外として扱っているかについて考える時間を持つ。  
⇒この取組が、異なる他者への寛容さを持つための土台として作用する。
- ③ 相手の主張を批評する前には必ず、相手の良さや人権・権利、相手の主張の肯定的場部分な部分について心の中で再確認を行うことや、批評の矛先を相手の人格へと向けないよう配慮するよう意識することを、何度も繰り返して指導する。

#### 5 意思決定への支援

- ① 「あれ」か「これ」かの二者択一的な考え方ではなく、「あれ」から「これ」へ繋げるために優先順位を決めていく考え方を意識させる。
- ② 「あれ」と「これ」のどちらを優先すべきかについては、自身が重視する価値により変化することを指摘して、どのような価値に基づいた優先順位の決定なのかを明確化させる。

## 4 育むべき主権者の技能 –ファシリテーションスキル–

より良き主権者として国家及び社会の形成に寄与するには、主権者同士の対話や合意形成を促進する技能が必要になります。1人1人が技能を身につけ、協力し支えあって大きな成果を得ることができるよう、対話の中での振る舞いについても意識的に省察する時間を設けることが大切です。

### <技能を磨くための支援ポイント>

- (1) 主権者教育では生徒同士の合意形成に達すること重要なのではなく、合意形成をするために必要な力を育成することが重要であることを常に意識する。
- (2) 同質の人々で行った完全な合意形成よりも、異質な人々で行った部分的な合意形成に教育的な価値を見出すようにする。
- (3) プロセス・デザインやプロセス・マネジメントを成り立たせるために必要な振る舞いのあり方(寛容さ、他者への尊重、情報の共有など)について、振り返る場面を持つことが大切。
- (4) 特定のリーダーだけがファシリテーションスキルを身につけるのではなく、傍観者も含めた全員がファシリテーションスキルを身につけ、グループの活性化に寄与する役割を担いようように支援することが重要。  
⇒このスキルは他者との対話である外言だけでなく、自己との対話である内言の発達においても有用なもの。

## ファシリテーションの基本

### 1 プロセス・デザイン

- ① 具体的な目的の確認  
⇒活動の目的について、誤解や考え方の違いがないようメンバー全員で確認を行う。
- ② 達成イメージの構築  
⇒目標を達成するとどのようなものが完成するのか、そのイメージをメンバー全員で確認して、全員が同じ達成イメージに向かって行動できるようにする。
- ③ 方法と役割の決定  
⇒達成イメージを実現するために必要な手順を考え、「誰が」「どのような役割」で「何を」「どの方法」で活動をしていくのか決定し、それを「いつまでに」行うのか確認する。
- ④ 共通のルールを設定  
⇒グループ活動では全員が同じルールで動かなければ、お互いの不信感が高まり協力できない。「どのような場合」には「どのような行動をする」のかを全員で確認する。

### 2 プロセス・マネジメント

- ① 発散的思考で意見を出す  
⇒どのようなアイデアが後々有用であるかは吟味をしないと分からないので、始めはくだらないと思える意見も否定・批判せずに、思いつく限り全てを出しつくす。
- ② 要点の確認を行う  
⇒主張には、「言いたい本質」と、「つけ加えた余談」が含まれる。主張者が本当に言いたかった本質を確かめるため、話を聞いて自分が理解した内容が正しいか確認する。
- ③ 事実と意見を区別する  
⇒メンバーにより主張された内容について、それが「根拠を持った客観的事実」なのか、「主観的な意見」なのかをメンバー全員で確認する。
- ④ 収束的思考で意見をまとめる  
⇒発散的思考で出し尽くした意見について、最も有用であると考えられる意見はどれかメンバー全員で吟味を行い、出された意見を必要な分まで絞り込む。

## 5 具体的な実践に向けた+αのアドバイス

### <問いを洗練させるために>

- (1) 「自由」と「平等」のせめぎあいや、「命」と「正義」の優先度など、時代や環境をこえて人類社会に共通する対立テーマを取り上げると、生徒に政治思想の類型を理解させやすい。  
⇒政治思想の類型を生徒につかませることで、生徒は次回から各類型の特質を踏まえた政策の考察や選択が行えるようになる。
- (2) 例えば「自由」と「平等」の対立を軸とした考察を、表面的な事象や政策は異なる対立テーマで何度も繰り返して取り組むことで、政治思想の類型に対する抽象的な理解が高まり、応用力が身につく。
- (3) 例えばロールプレイの要素を取り入れて、「自由」を支持する立場と「平等」を支持する立場を入れ替えながら問に対する考察を行わせると、他者への寛容さを身につけやすい。

### <指導と評価の一体化に向けて>

- (1) アクティブラーニングを中核とした学習では教師による学習評価よりも、生徒自身による自己評価や、学び合いを行った生徒同士の相互評価を中心に評価を実施した方が、指導と評価の一体化に結びつきやすい。
- (2) パフォーマンス評価の方法を取り入れてルーブリック(評価基準の一覧表)を予め設定し、授業開始時に生徒に開示しておくことで、生徒は評価基準(=到達して欲しい主権者像)を意識して課題に取り組むことができるようになる。
- (3) 評価基準は以下を参考にしつつ、具体的な行動内容を示すように設定するとよい。

**関心・意欲・態度** 異なる立場や異なる価値を積極的に理解しようとする取り組み姿勢や、自分には何ができるのかを考えようとする態度を評価する。

**思考・判断・表現** 自説の内容が他者や異なる価値に対する寛容と配慮を含んだものになっているかどうかを評価する。(⇒言語活動の充実とつながる)

**技能** 実践共同体(同じ課題を解決しようとしている協働集団)をより良く発展させるために行った言動を評価する。

**知識・理解** 各教科で身につけた知識や主権者教育の中で把握した政治思想の類型が、活動の中で活用されていたかどうかで評価する。

### <主権者教育に関する資料や副教材など>

沖縄県選挙管理委員会ならびに財団法人明るい選挙推進協会では、主権者教育(市民性教育)に関する資料をWEBサイトで公開しています。

両方のサイトにて沖縄県版の副教材をPDFにて無償配布しておりますので、ご参考ください。

- ・ 沖縄県選挙管理委員会 市民性教育副読本配布ページ  
<http://www.pref.okinawa.jp/site/kikaku/shichoson/11208.html>
- ・ 財団法人明るい選挙推進協会 主権者教育特設ページ  
<http://www.akaruisenkyo.or.jp/citizenship/>